

資料館だより

2020.1.1 No.106 (季刊)

編集 国立ハンセン病資料館
発行 公益財団法人日本財団



目次

- | | |
|--|---|
| <p>P1 2020年元旦 謹賀新年
本年も資料館をよろしくお願ひ申し上げます</p> <p>P2 2019年度秋季企画展 開催報告
『『望郷の丘』 盲人会が遺した多磨全生園の歴史』</p> <p>P2 団体向け語り部活動を再開</p> | <p>P3 「没後60年・志樹逸馬展」開催
よみがえるハンセン病詩人</p> <p>P3 新企画 ミュージウムトークがスタート</p> <p>P4 資料館の現場から その⑫ 植栽管理について</p> <p>P4 お知らせ／利用案内</p> |
|--|---|

2020年元旦

謹賀新年 本年も資料館をよろしくお願ひ申し上げます

年頭にあたり、昨年の資料館の活動を振り返ってみたいと思います。

従来の常設展示や春季・秋季企画展に加え、さまざまな試みに挑戦してまいりました。映画の上映会や、外部識者を講師として迎えた講演会をひきつづき行い、広い映像ホールが毎回満席となる好評を博したのに加え、昨年からは新たに、夏休みの宿題を抱えて来館する子どもたち向けの展示解説や、学芸員などが日頃の研究成果を発表するミュージウムトークなどを開始しました。

また、多くの皆さんに情報をお届けできるよう広報に力を入れ、昨年度の公式Facebookアカウント、YouTubeチャンネルにつづき、昨年は公式Twitterアカウントを開設して新たな情報発信の試みもスタートさせています。

これらによって、より多くの来館者に足を運んでいただくことができました。来館者アンケートを見ましても、新たな展示やイベントを通じて「初めて来館した」「久しぶりに来館した」というお客様の声が増えています。

一方で、2019年を振り返るとき、社会的にもハンセン病問題の大きな節目であったと感じます。

6月には、ハンセン病家族訴訟の判決が下り、翌7月国が控訴を断念することによって、判決が確定しました。11月には患者・元患者の家族への補償と差別や偏見の解消を盛りこんだ「ハンセン病家族補

償法」が制定され、合わせて「ハンセン病問題基本法」も改正されました。

ハンセン病資料館は1993年に開館し、2007年に国立の施設としてリニューアルオープンして以来、ハンセン病回復者の名誉回復のために、展示やさまざまな手段を通して、普及啓発を行ってまいりました。しかし、家族の皆さんがこうむった被害に関する普及啓発は、必ずしも十分でなかったことを率直に認めざるを得ません。広い視野に立った普及啓発が必要とされています。

新年は、これまでの資料館としての活動に加え、新たな社会的課題に応えるべく、より一層の取り組みをしてまいります。来館者の皆さんが、ハンセン病問題を他人ごとではなく、自分のことと考えて資料館を後にしていただけるような活動を目指します。どうか資料館をこれまで以上に応援していただきますよう、皆様に心よりお願ひ申し上げます。

成田稔（館長）



2019年度秋季企画展 開催報告

『望郷の丘』 盲人会が遺した 多磨全生園の歴史



企画展の様子

2019年12月27日まで秋季企画展『望郷の丘』盲人会が遺した多磨全生園の歴史』を開催しました。

40年前に編まれた証言を通じて多磨全生園の歩みを展示するという本企画では、証言の部分を透明なシートに印刷し展示ケースのガラス面に貼り、その奥に証言で話されているモノの実物資料や当時の写真を配置するという表現手法に挑戦しました。文字通り証言を透かして、実際の資料から当時の園や、不自由者の状況を鑑賞するという試みになりました。

関連事業としてはギャラリートークのほか、園内フィールドワーク『望郷の丘』に描かれた多磨全生園を巡る』を複数回開催しました。また、講演会「元職員が語る多磨盲人会一吉野志げ子さん・亀井義展さんをお招きして」では、盲人会の活動の具体的な様子や会員の人となりを、お二方から伺いました。また「やってみよう、鈴ボール！盲人会のレクリエーションを体験」では、幅広い年齢層の方々に「見えない」という感覚や、知覚麻痺や運動障害を想像していただきました。

今回新たな試みとして、点字チラシならびに音声読み上げソフト用ホームページの作成を行いました。視覚障がい者関連団体への周知を行い、「点字毎日」や、NHK「視覚障害ナビ・ラジオ」でも取り上げられました。視覚障がいをお持ちの方に向け、展示の構成、資料の配置、いくつかの証言ならびに実物資料を選んでの解説も行いました。

展示を、見ることを前提としたメディアと考えた時、視覚障がいをもった観覧者へ何をどう提供できるのか、多くの難しさも感じました。今後の課題も見つかる企画展となりました。 (大久保栄央)

団体向け語り部活動を再開

当館では1993年の開館以来、多磨全生園入所者の佐川修さんと平沢保治さんのお二人が、主に団体向けに語り部活動を行ってきました。しかし2017年1月に佐川さんがお亡くなりになり、平沢さんも同年3月をもって資料館での語り部活動を退かれました。その後は、休日に「ハンセン病体験講話」を実施していますが、平日に来館されることの多い団体のお客様に当事者のお話を聞いていただける機会がない状態が続いていました。

しかし、ハンセン病資料館等運営企画検討会が2017年にまとめた「ハンセン病問題に関する普及啓発の在り方について（提言）」では、入所者や退所者のなかから語り部を引き受けていただける方に活動していただく方針が示されています。また、団体のお客様からも当事者のお話を聞きたいという多くの要望が寄せられていました。このことから、語り部機能の存続は当館に求められている重要な課題であり、上記の状態を放置するのは普及啓発という当館のミッションに鑑みて大きな問題があります。

そこで昨年10月から、平沢保治さん、山内きみ江さん（多磨全生園入所者）、石山春平さん（社会復帰者）に平日に来館される団体向けの語り部活動を行っていただくことになりました。かつてのように団体ごとの要望に応えるのではなく、すでにご予約いただいている団体と語り部の方のスケジュールが合う日に実施します。また、一人月1回、合計で月3回程の実施になります。以前に比べると限定的ですが、今後は可能な範囲で語り部の人数と実施回数を増やし、なるべく多くの方に当事者のお話を聞いていただけるよう検討していきたいと思います。

(大高俊一郎)



団体に向けて語り部を行う平沢保治さん

「没後60年・志樹逸馬展」開催 よみがえるハンセン病詩人



展示の目玉となった貴重な自筆ノート

2019年11月9日から12月1日まで、ギャラリー展「没後60年・志樹逸馬展」を開催しました。

志樹逸馬（1917～1959年）は、ハンセン病療養所を代表する詩人です。戦前、全生病院（現・多磨全生園）に入院し、のち長島愛生園に転園。長島詩謡会の代表をつとめました。作品は、詩人の藤本浩一、永瀬清子、大江満雄、哲学者の鶴見俊輔らに、高く評価されてきました。

本ギャラリー展では、ご遺族の協力で、貴重な自筆の創作ノートを数多く展示することができました。

曲った手で 水をすくう
こぼれても こぼれても みたされる水の
はげしさに
いつも なみなみと 生命の水は手の中にある
指は曲っていても
天をさすには少しの不自由も感じない
（「曲った手で」1954年6月22日）

展示を通して、知る人ぞ知る存在であった志樹逸馬というハンセン病詩人の魅力が、多くの作品とともによみがえったのではないかと思います。

関連イベントとして、11月17日と12月1日に、批評家の若松英輔さんによる講演会「志樹逸馬の詩と出会う」を開催しました。若松さんは、「人は誰しも言葉にできない体験を持っている。その言葉にし得ないことを確かめるために詩を書く。志樹逸馬の詩にあふれている生命の讃歌は、底知れない闇から出ている」と語り、多くの聴衆を魅了しました。

（木村哲也）

新企画 ミュージアムトークがスタート

2019年10月より、学芸員などがそれぞれの専門分野の研究成果などについてわかりやすくお話をする連続セミナー「ミュージアムトーク」を開始しました。話者と参加者とがともに盛り上げていける、身近でバラエティに富む企画を目指しています。

第1回は木村学芸員「ハンセン病療養所の詩人たち」。台風による日程変更にもかかわらず30人を超えるご参加をいただきました。11月は金学芸員による第2回「ハンセン病問題と在日朝鮮人」。療養所の中の民族問題をとりあげ、100人を超えるご参加をいただきました。第3回は12月、「くらしの変化を伝える補装具」（西浦学芸員）。生活史からのアプローチをお聞きいただきました。アンケートでは、このイベントをきっかけにハンセン病問題に興味をもった、極めて刺激的な話、資料が豊富でよい、などの嬉しい声をいただいています。

新年以降の予定は、以下のとおりです。

第4回「ハンセン病療養所の音楽活動」（1月18日、大高学芸員）

第5回「フィリピンにおけるハンセン病問題の現在」（2月15日、木村学芸員ほか）

第6回「多磨全生園の隠された史跡を歩く」（3月28日、橋本学芸員）。

各回に話者のカラーをにじませつつ、患者、回復者の軌跡とハンセン病問題への扉をご用意いたします。ぜひお運びください！（西浦直子）



第1回、木村学芸員のトーク。満員でした！

資料館の現場から その⑫

植栽管理について

私は10年ほど前から、資料館を訪れてくださる来館者のみなさまを最初にお出迎えするこの緑を守る仕事をしています。

主な業務は雑草の除去や落ち葉の回収、樹木の^{せん}剪定などです。生き物を扱う仕事なので、毎日の手入れが必要となりますが、その働きをねぎらうかのうちに、資料館のまわりでは、春は満開の桜が咲き誇り、秋は彼岸花が^{ひがなばな}一斉に^{いっせい}花開きます。

私は20代の頃、多磨全生園に職員として勤め、主に入所者の方のお世話をする仕事をしていました。その仕事に就くきっかけとなったのが映画「砂の器」でした。この映画を見たあと、私は多磨全生園を訪れてみることにしました。訪問した日、たまたま園内で出会った入所者の方に明るく挨拶をされ、私がこれまで療養所に対してもっていた暗いイメージは払拭されました。その後、知人を通じてこの多磨全生園に勤めるようになったのです。

全生園では、入所者の方と一緒に粘土などで作品を作るなど、療養所での生活に少しでも楽しみをもってもらえたらという気持ちで様々な企画を考えました。職員で「^{あずさ}東座」(センター^{ひがし}東にちなむ)という劇団を作り、芝居を披露したこともあります。

それから時が経ち、今は資料館のまわりの緑を日々世話しながら、資料館に見学に来てくださる大勢の方の姿を見てきました。ぜひ多くの方に一度、そして二度三度と資料館を訪れていただければ幸いです。これからも資料館を中心にして入所者の方や外の方がこの緑や花について語らう、そんな場所をつくれたらと思っています。(中島久行)



資料館北側に咲く満開の彼岸花 (2019年10月2日撮影)

お知らせ

■多磨全生園絵画展

会期：2020年1月11日(土)～1月31日(金)

会場：当館ギャラリー

あかぬまやすひろ

■赤沼康弘弁護士講演会「ハンセン病問題と弁護士の社会的使命」

日時：2020年1月25日(土) 14:00～15:30

会場：当館映像ホール

■石井正則写真展「13 (サーティーン) ～ハンセン病療養所の現在を撮る」

会期：2020年2月29日(土)～5月6日(水)

会場：当館企画展示室



■その他イベントにつきましては、当館HPまたは公式Twitter、Facebookをご覧ください！



当館HP

利用案内

■開館時間 9:30～16:30 (入館は16:00まで)

■休館日 毎週月曜日 (祝日の場合は開館)
年末年始、国民の祝日の翌日、
館内整理日

■入館 無料

■交通

- ・西武池袋線 清瀬駅南口より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
([「ハンセン病資料館」下車])
- ・西武新宿線 久米川駅北口より
西武バス「清瀬駅南口」行バスで約20分
([「ハンセン病資料館」下車])
- ・JR武蔵野線 新秋津駅より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
([「全生園前」下車、徒歩10分])
または徒歩約20分

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13
TEL 042-396-2909 FAX 042-396-2981
URL <http://www.hansen-dis.jp>